註ど物真似　春

ロ 9
3873
1

黒羊子克齋に過る。甚主人短褐衣を着。折角巾を載き。書を左にし。筆を右にし。意烏於邑し。愚若貍似して如神離者。如心疾人。浪人之袴乃如く河漏乃軟かめし。賓〻肰として。蝨を捫て呼曰。于嗟黒羊。來前。汝雀の蛤と為を知るや。黒羊

函 ロ9
號 3873
卷 1

早稲田大學圖書館
昭和25.11.14

子對曰。我其語を聞く。未知其実。曰不知。於是主人不[illegible]、[illegible]目切歯。牛の如く喘。貓の如く悶弗肰として曰。鳴呼汝ハ真の羊也。愚にして與に語る可らずと。叱玄。黒羊子。膝行頓首して退く。退て思へども。其説を得ず。少頃し

て。又前で曰。菅三ハ君子也。空海ハ貴僧也。俗之巫誑する。変して竟に雷の親方。若衆の開山となる。所謂雀乃蛤となり。薯蕷の鰻鱺と為る。説に非ずや。主人歡喜微笑して曰。善哉善哉。其書を投して見せしむ。黒羊子閲して曰。是蓮[illegible]兼好

か流亞也。主人曰否。彼等ハ皆或ハ三位になれざる怨言。師直に睨れての遁辭。我ハ疑惑を破らんと欲す。汝何吾を以。彼地震を恐。大災に脅。饑饉大風都遷に辟易せし腰抜。西臺の反辭を。公義に先を越され。伊州へ翔落して。伊賀守護乃。獨娘に意氣傳ふ。奴等者に比するや。胡盧胡盧。此書の全意。於是乎明矣

戊申十一月中旬

庵羊子序

蛙の物真似自叙

蛙やんハ何ぞ鼃末天地の一閃虫。形を獣に似ても。裸虫部をはさまれハ。瀬水の濁さゝ游をもあるくバ。井戸泉にハ清きを飛込む。華壇の奇麗なれバ

好うを思へハ。縁の下れ蜘蛛乃巣なども厭はず。其心素しそう紙しやいちを。真似しは何。田の畔かんを吟行し。摩眼を手かん突て。にわれ鍾の出方題を乱堕く也喧。又物真似

うつすや。さる猿ぞ入レ虎ニ顧ハ。
唯龍ハなれざる小蛇の。黙せる
心底ハ瓜斗。戊申孟春
散人克齋名ニ其書ニ云爾

宮氏

惟恩生

蛙の物真似巻之一

目録

昼霞乃学問
秘密の霊水
談義の香破焼

蛙の物真似巻一

克齋主人謾編

昼寝の学問

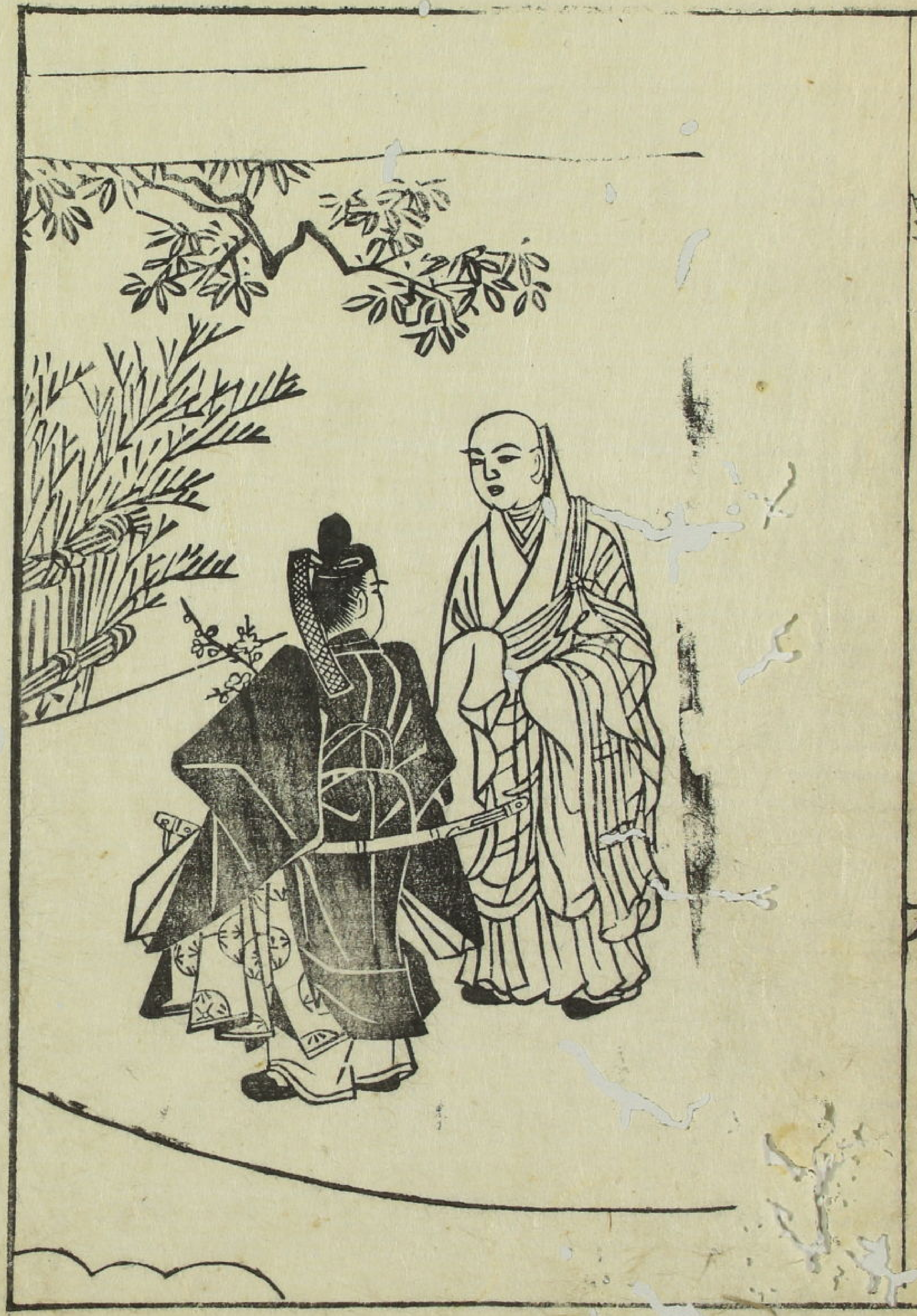
衒者の上下を著し。天窓をさげて老人に公釈するを。或人此見て嘘に似ると指さゝやきし。いづれ好次第なるべし。されば陶令が謂し五斗米の為に折腰。召閉ヽ背諂笑ありさ而。孰りか可笑かりしや樹下石上よりも心穏に。力をやすく暮してんかと。三十にかゝらぬ身渡世乃。立ゝぬ分別

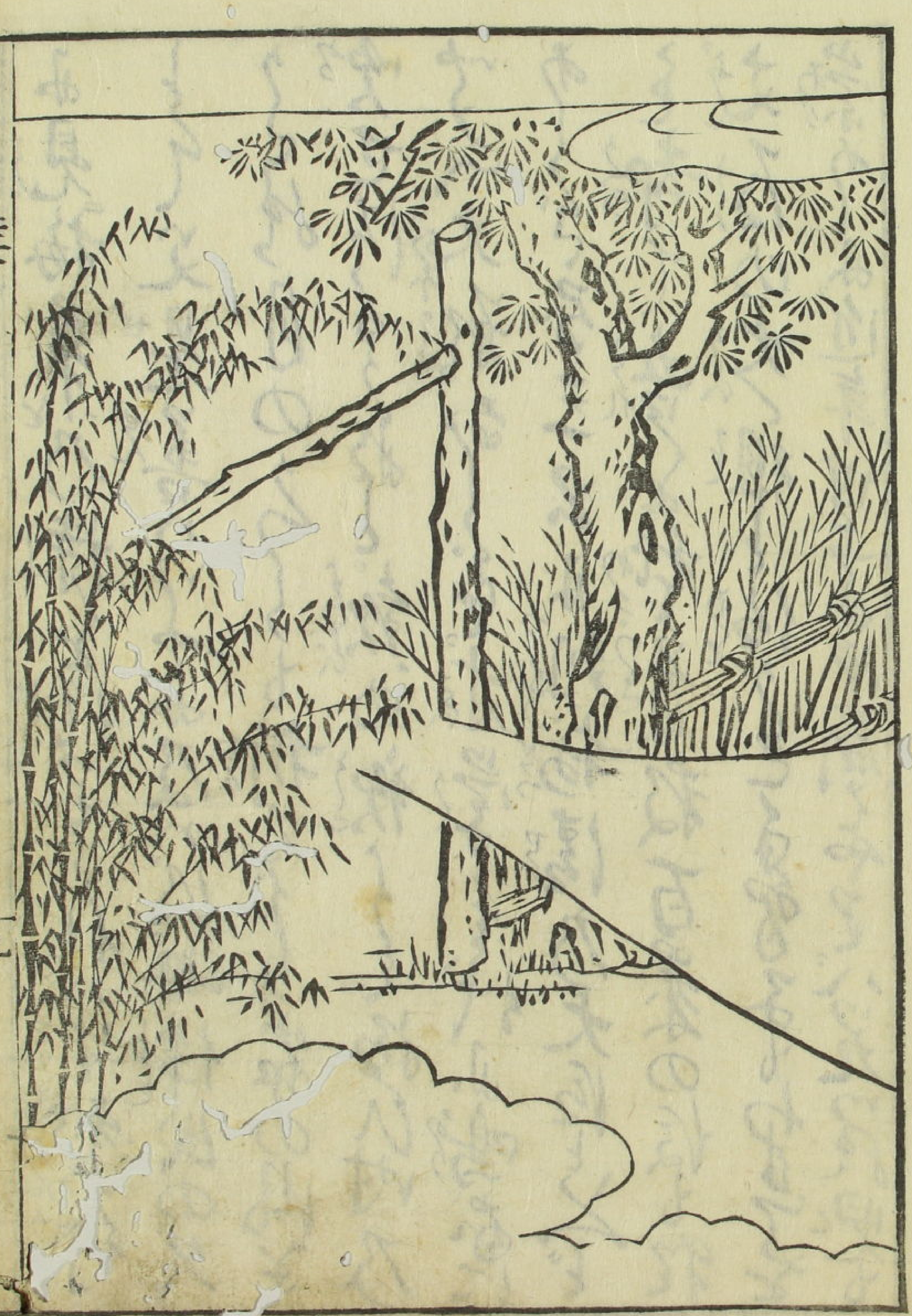
ばかりとなれど。本来の面目坊となのりぬ
あらん。儒をまなべど一向に義に泥まず
老荘に似て偏屈ならず。無上霊覚ハ覚
て又禅にもあらず。只心のまゝ高上に
遊しなる男ありけるが頃ハ陽月のはじめ
小春よりや世も暖まり。是でハ蝶に
もなりそふなものと下心。南窓へ
日のさし入るに枕引よせ。うつらしハ
はたりそふなるや。伏見の里の君にかよふ

逢ぬ夢ごゝろ。居宅ハ膝を容るゝばかり
住居一力の助もなく庵して簞瓢いけ
とても空し。されど一幅の横物に蘇軾
が竹。花も投入あり。古びたる心より花
をきゝのほうけたるを愛し。虫代とも
あるを椽まどそばに清らハ、ことのほど
わしやの軒のゞらくさと。草ふかき扃
をほとく音信る。誰ならんと出むかへバ
過にし二月や。下の五日にむかし夢

なくなる菅丞相とも謂べき人躰。衣冠正
しく。又一人ハ羅色。袖のうちにて手を
と因るハ身もしるにき言秘密の骨頂なれ
らん。伴ふ人くにハかゝる人しそ識り難
かしぞらして高位に而じハ得を見
なんと。例の高上乃氣質からまり
清徳し。お尊を眉となぞなからず瑞れ
バ。彼衣冠のごしきん人分けり耳し我ハ見苦
乃為ちいさ也。今一人の億ハ宮海也との記ハバ

そのうへ彼男まきみをも出し。死せる
人再かつらに。邪ハ正に克ざる正躰をあら
りし。なくへせ殺に青松葉の姿を漸く
そり。信夢のかうりにぞをりける。扨も
世上文物大きに廣まり都鄙に名を
得し多くの学者。或ハ宋儒の風式を
詰るも唐人もいまうごとつけて恭見
をいでし。或ハ格物窮理の学。心術の工夫
者計に遑あらず。我朶も十一先生月經





に見梅華乃詩を作ありけれバ生知安行とて父是善ハいふに及ばず。母伴氏の久かたの月のかつらも折ばかり。家の風を吹せたるかなと。歓の歌よみて祝ひ時乃やうへ大器なりしかバ才学累代に鳴響にあらざる三公に列り摂政乃大臣といへどを却て吾是と続首。教百家の據も猶文臣の大祖と仰がれ手習子もかまへてを崇めしに。近年世上に学問をやめ。八ツ九ツの児も

詩作をいやし唐韻ありて論語よむなどさとく我を折ぬ。それ由へお計口利やうるハわまへてを荘右が弟子ほどにもおもはぬぞ。詩作をまなひ文をこのみし世上にまゝかゝる是と心得ぬるもの多し。小野篁も嵯峨天皇乃御宇にハ遣唐使の命まで受何ふでても曰をききしに。前宮連の當字あそびを今板行に出され天窓を掻てそれが作でハないといふて是より傳ふじや。六[illegible]

辻かゝ閻魔乃帳付に此處毎に[illegible]
ござりの風流ハ作もありて夜[illegible]事に
あらぞや。何事ありても世ハ[illegible]信ずることし[illegible]
しひとの八管が作との閻魔の廳へ倶生
神の膝代にいりのと褒るされ今ハ物の
冒なる〇にてふぢひ子なるにさんへ笑ふ
いさてく口惜との事むりなりわけも
時平の大臣乃讒言を忿筑紫の配
所ありして天帝に状をはるる天上して

雷神ありなつことハ生悪なる我法など言
陽の変化にあるりて災異は是あく
おこることなりをかゝらしいこゝろにも
讒臣を上にあけて忠臣無実の讒にあふ
むけにハ天乃感應ありて怪の変も
あるぞ〇なれどもなしてし。大雷のとに
くぜさつしでを延喜延長年中天下旱魃
洪水あげて疫癘おこし皆々代記にて
見るべし。倩〻雷神のおに比叡山[illegible]

坊尊意(ばうそんい)が許(もと)へ仕(し)けれバ、わが既(すで)に帝釈(たいしやく)の
御免(ごめん)をうけ雷(かみなり)となつて我うらみをはらすべし
人々を取殺さん。祈(いの)りては貴(き)僧(そう)乃
法力(ほうりき)わざをなさせ給ひそといふの
みかどの召(めし)ありとも尊意ゆめ〳〵参内(さんだい)
して三度(ど)までハ辞(じ)しまいらせて勅(ちよく)使三度
なりともなびき給ひそと。尊意(そんい)のいはく。されど
いふとも王土にすむ身(み)ならバ。勅(ちよく)使(し)
なるときハ参(まゐ)りてまうさむとて菓子(くわし)をすゝめ

出されける柘榴(ざくろ)をと喰(くら)ひかみくだきて妻戸(つまど)
にはきかけ給へバ、あれハたち
まち火焔(くわえん)となつて戸板(といた)みな三尺ばかりも
え上(あが)る。尊意これを見てさわがず洒水(しやすい)の
印(いん)をむすんで。その火を消(け)されけると
ぞや。さるにても何とものゝこまざるをそれが
口が火焔(くわえん)ではいりまし。火をぬいてあつまて
なんと怨恩(えんおん)なるべきぞ。それ火をとる
ありともをまもかくりでもなし

いのちも消(け)されるなどゝ恐がりし事は奇妙(きめう)でもなし。かゝる事ハ皆戯言(ざれごと)とおもふ臍し。却(かへつ)て恥(はぢ)とおもへバ極めもしなれ身(み)が真赤(まつか)になり。なるが村年父子の党逝(とうせい)ハいよ及ばずとも清経(きよつね)希世(まれよ)が雷神に臍(へそ)をとられしも。子孫(しそん)ハさぞ絶えてそれが不勝(めんろう)くなりそうでありませんとおもふにあれど。渠等(かれら)ハそれ迄雲中の尻(しり)抓(とる)なく雷神(らいじん)まも浅ましもそのやうにこそ崇(たゝ)るが

それやこそ昊(ゆゑ)がとゝ其(その)身が讒(ざんげん)神(そくひやうろうくしろ)の神わざといふものにより殺(ころ)されぬ。是を天誅(てんちう)とやいはん。全(まつた)くそれハさうならぬ事なれどなるほど人附会(ふくわい)していろいろの説(せつ)を設けいひちらされて末代(まつだい)迄もつたへそ。さて又渡唐(ととう)の天神とて径山寺(きんざんじ)の無準(むじゆん)が衣(ゑ)をとりたると申すの画像(ゑざう)。唐人(たうじん)を見ず。和人(わじん)ともしらぬ筑紫(ちくし)のものかへ見えぬハそれも祖(そ)をうち出。是にて趣して

の偽作妄説を志るべし。宜なるかなむかしハ
わまでごろ紀の傳教を以てどもも智池
ちし教よりも僧は阿び學識を僧ハ入唐
して惰弱多し。只人にハ四角なる文字
是なるをもの紛なる是。適有を以てもと
彼師を探せバ直ハ坊主なり。是より
おかりて妖術どもを施し乃ち事を吐哉し
ほまるにハ己が法威を耀さん為に死せる
人にあらざるの類に見ゆるものゝ。無情なる事を

説き来るハ例の知識なれバ実にもやと
信を發し崇く事實と成録書に
記し梓にちりばめて後世に魯朱をか
うかしむ。是非なれる事なるとぞ謂
いひける

秘密の奇水

弘時空海ハ田公の係らるゝ海ヘ作しも
幼年より出家し入唐渡し恵朝乃

されバ橘の逸勢図らず難風に出合。漸く後日本に帰る事を得。法を求むるに弘仁其時内裏に真言院を建行し東寺一宗の規模ハいふに及ハず。今におゐて天台真言の法出家ハ王子皇孫摂家清華の歴々を弟子とし他宗に於て僧綱位階を極む。是偏に仏法王法を興發せしむるによりて、いにしへより今に至るまで崇敬他に越たり。しかるに

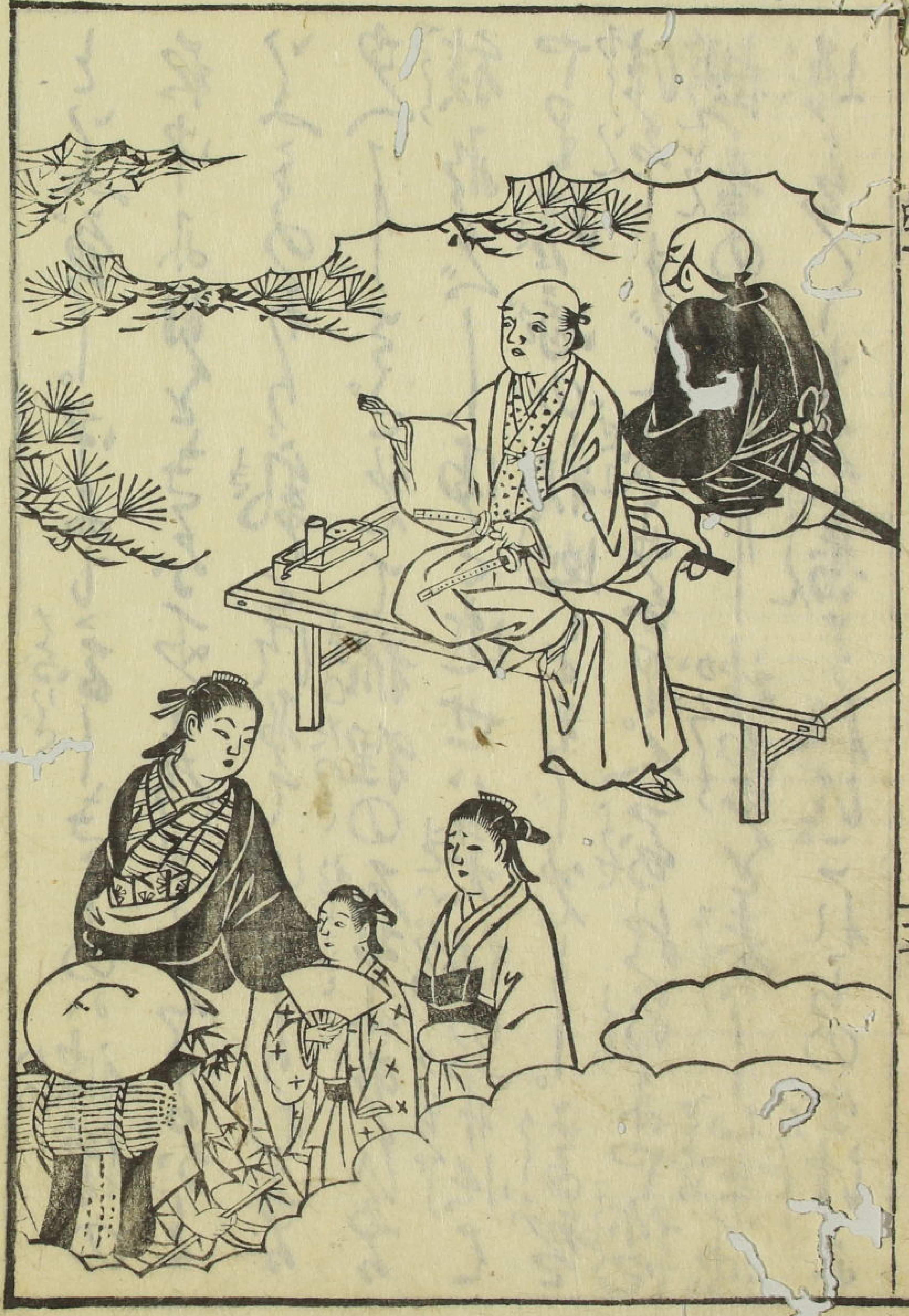
守敏と法力を争ひ守敏を呪咀し。西寺を潰しぬるも弘法が法力すぐれたるゆへ、かくのごとしと諸人おそれをのゝ多くの奇妙ぞ称し揚て説くし信人ハこれを敬て尾に付進を法花擬く寄妙を信し敬へど。まこと心ある族ハ中く合点せざりし。抑ハ空海といふハ妖僧にて入唐して幻術魔法を伝来し人の耳目を駭せ。邪法力法助にまよはするなるべし

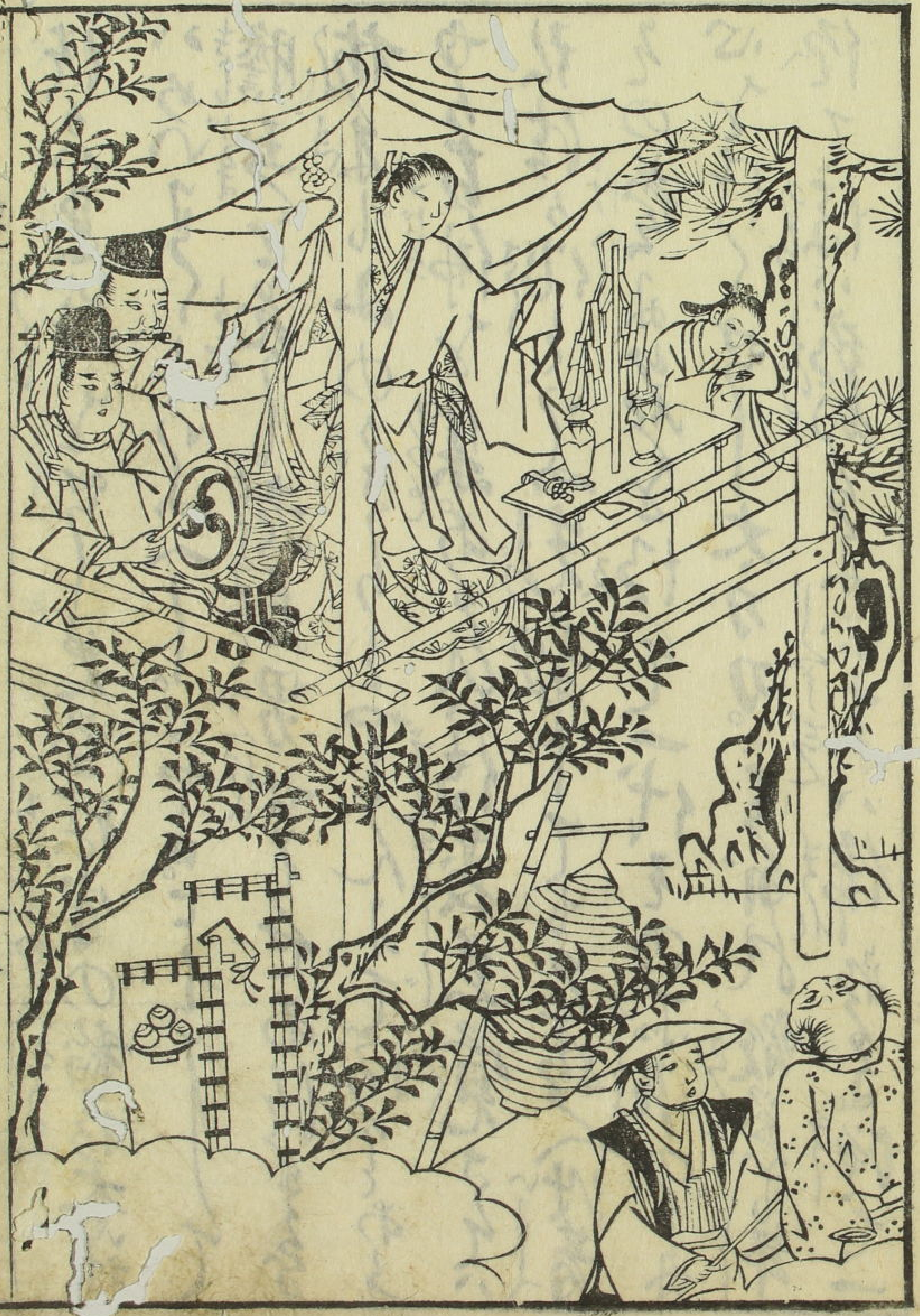
てーと渡しの論(ろん)に出合。一人(ひとり)〳〵に云(いひ)まけ
もなしとぞ。それより千(せん)年星霜(せいざう)を経(へ)ぬまゝさ
今以て國(くに)めぐり桃(とう)のならぬ里あり。むかし
通りあはせて桃を請(こ)ひしに姥(うば)のをしく
ぬ惜しし。むハ実(さね)とも実(み)のかたく渋(しぶ)と待(まち)
しお兇しにより。いまに實(み)ハの里でも
悪(こくく)くなりて今(くわうハ)までといふ。わが口ひとつ
のためにすゑ末の代までもう種の悪事を
なしなば。何を以てか弘法といはるべき。

[illegible]桃のなき土地(とち)にハめづらしとて人々
その外いかなる旱(ひでり)にも此清水(しみづ)ミつまさる
し。是弘法のいのり出しける霊水(れいすい)なり
とてみな取〳〵けり。是ハそれと替れ
こゝ迄のかまど。あるハ山に像或ハ木あるち
出(しで)ることの外ハ皆山を穿(うが)ち木を伐(こり)バいゝ
あらる清水も湧(わく)ことありて。そのほれハ弘法の
祈出(いのりいだ)せしもいへども霊記。却て[illegible]
に与(あたふる)ちらし。皆々贔屓(ひいき)の引(ひき)倒といふ

へし又宝永の比当都中に的の目（まと）といふ
はやりしとの。取沙汰（とりさた）。其意ハ世上疫癘（えきれい）
かくのめくりけ目をもつて的にて挑（ひさき）る
ことを含（きく）まれしバその害（がい）をまぬかるよし
此風説（ふうせつ）。一通りハ咄人これをも俳（はい）にかきて
事とする的の目。こゝに閑極にて不埒（ふらち）
なる不作中に気（き）に成（なる）づき事とも見へ
ぬる世上の疫病（やくびやう）をのぞかんとならハ今お
上手（うはて）此分別（ふんべつ）もあるべし。迂遠なるありけり

といふ事也。中にもあやしきものハ彼（かの）僧の
都中に目をときふせをたりにみえけるなど
いふものあり。気（き）をとりあへて此方よりむかふ
事へ入りきざえて狐狸（きつねたぬき）の類にあざむかる
族（やから）なるべし。凡そ近世ハ異仏（いぶつ）の開帳（かいちやう）も
やまと嵯峨（さが）の釈迦（しやか）をはじめとし。高野（かうや）
法然（ほうねん）上人まで讃（ぜ）にみな聖人。寄（よせ）此の御にや弥陀
観音（くわんおん）の仏前あり神楽（かぐら）を奏し乙女（おとめ）の他。
過（すぐ）るとも不審（ふしん）なれバ。これらの生計





法ハ此上滓をとせし先谷鎮守の稲荷大明神ハめいよくいふべし。ピヤロピイりして膽玉を冷し。老若男女をもおはしまく植木も山のくづれとやらんみてはるとある古佛を集めるひハ伝教慈覚さてハ弘法が作といふ先数にても見ん斯へ此昔その藝に名を得て一代その不如の三み心をきくせし太刀刀。ニ至鍛冶し年経て後ハ霊あるに正ぐ八幡坐すに傳て一宗の法燈を挑。経論に眼をさらしまた身ハ俗乃暇有て仏像を刻べき。縦令一代より土漆三体原ふ作りとなりとも後世ふ混乱くきるほどあるべき所なれことなしておくバ外の所中とて道理を通ら事なくし。ちかいしもつ井坊場を観バ画僧が作はも手細ぬ千手観音。普賢菩薩別して象の肉去ぬなどあまり又事で腕を抱へ。細き文手經も大師流とて乾やうしを

見るまゝにそくおどけたる筆跡（ひつせき）更（さら）なり心得がたし。されバ和流（わりう）よりてまなぶ人心得そのハいやがりて。唐流（からやう）風筆意（ひつい）を好（この）む。本来衛夫人（ゑいふじん）より義之（ぎし）に伝（つた）へし筆意を上代ハ写（うつ）しよれバ唐和（からやまと）の隔（へだて）なし。いつれも近代ハ子孫も素媚（そび）篆字（てんじ）ハ分字（ぶんじ）を面（おも）白（しろ）からずぞなり淺草観音み表世府ふ姫路八分字み三社の説寛（がんぜん）を掛（かけ）てよろしきなりぬべば手み凡俗み下り筆を染（そめ）し

く和流（わりう）ハ古上み塗（ぬり）より流み徴（あり）ぬ。是を文彼唐様好（かのからやうずき）八兄となし。石摺法帖（いしずりほうでふ）よりわかり難とおもひしか。和筆ハ一向（かう）おもしきと云ひ三筆の流中をたちし一（ひと）あかしに云（いふ）ちらしみる人をとられバ。未（まだ）永字の八法も知らぬみ。義之。子昂（すがう）を初（はじめ）文徴明（ぶんちやうめい）。米元（べいげん）章（しやう）。などの石摺（いしずり）のことを扱（あつか）ひ。取しあつくず方なりみ批判（ひはん）し日本乃先達（せんだつ）をさゝしぬ。識（まこと）なり枝葉（しよう）み居てその根（ね）をと

悪成べし。おもて御ざる通りの縁ぐ
竹ちりし悪敷なるハ男女の元祖を思
僻に至てのとり沙汰。まそく是非
なれぬ児童の業をようしとて是
戯言をすくらひに戚々と魂をいとしむ。
既に書経に頑童を比するの戒あり。まさ
漢乃哀帝の董賢を愛し。衛の霊公
弥子瑕にめでゝ。桃の食さしを喜ばし
ともまさひと惑せられしと呉国して

さりもやまてしより数百年の昔にありて
なほまさなるべし。例乃錆矢敵力
実に毘遮比丘といふ成べし。そのほか
真雅が業平朝臣の曼陀羅丸とめでし
児盛の美質にうちこそ。いふてで世の
岩倉しじ。いたづらハしそあれ哀しき
さつらしハ人乃口にもかゝりてこれ
僥倖とてふべしと若切てぞ嘆きまし
宣ふる

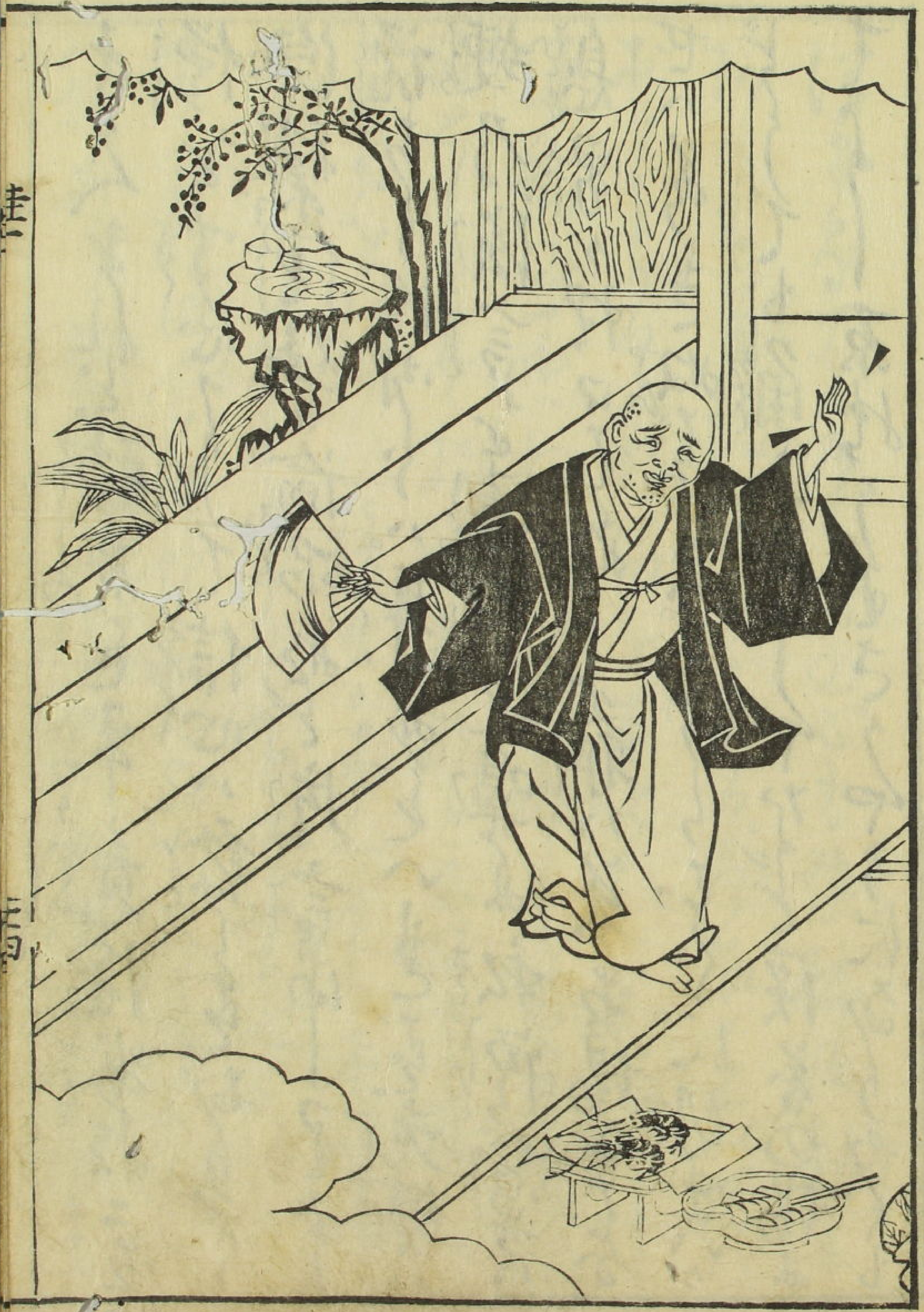
談義の香破焼

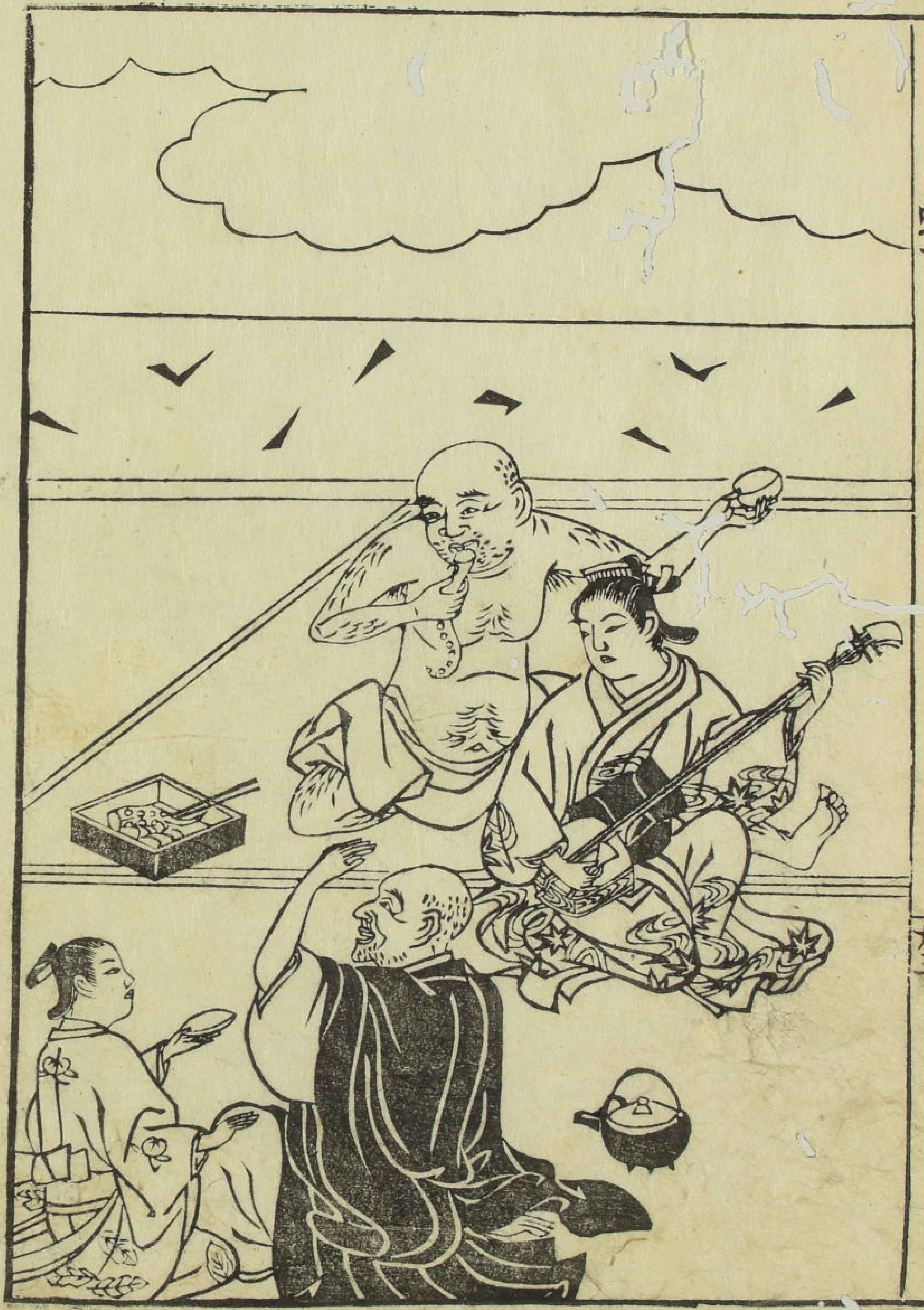
あまもれ、咲さそくめでたしきは物種也。みな人はもとても仏種ハ昔てさへ称と賢者飢僧者宴しよ申に佛法犹吉物よかいりなる芋堀末兎和尚上人と伝り也。ハづれをみても面ぶれしかねハ仏教ぞ有りてせんせ。弘法曰されハ釈尊の教は捨身をとふとして。名利をもはなれの外かし乞食頭陀とて。人はなれて飯る金を食

かゝる位高官をも願はず。下人となるなり。頭陀とハ天竺の下人なり。樹下石上とていへる事は山にも野にも虎狼の餌にもなりなバ。虎狼のむさふりもあるも善根とおもふ心にてこそ。釈尊ハ鳩乃秤に身をそがれしと申伝へたり。今ハ古ハ稚く幼少より出家させぬれバ氏なき凡人も貴人備る僧となりがたしよ欲ぶかく。而して当代の一宗ハ。むかし僧

出世を目がけ。弓しや。弦しや。結跏坐禅をおしえらひ。もちや何人目にて仕合婆金剛山白吉寺。労て紫衣の極上院へまゐりしと。人ありしも。咄しわけもまかりとおもふ力あり。望をとげ大寺へ入院まるといぬや。上下の衆の當惑先住の出士。あまりを払て六尺あり石割を蹈せ諸侯大夫の門へも家々あゆみ経あり大門を開する仕受。さりとは可笑あり

されば釈尊も我をおろかし。師を他宗で弟子ハ五百も千も扈從さするとも見よゐらんきみ。劔戟を横へてある傍若無人の歩あり若党を召連るゝハ何乃事ぞえありや。さて又説法談義ときてある座にあがりてハおかしをかしの軽口中にも名をとる導師ハ歌舞伎役者絶手八ろ文。歴々乃和尚にハ似合ぬ事も又狂言綺語も讃仏乗の因縁とおもひ





多く人まれど。随分と畢竟後生安楽豆、僧をやす心ありて。信心ハ発しぞ。おりく涅槃経。譬諭不知ど。片言聞ておりく説ちらし材らハ。耳ゟとへまだも。老婆ハ嫂乃法言を儀家縁嗅ゟ私語バ。鼻ハ息男が理口たねし。爺ハ茶番場をさかせバ。あきぬだらハ。皆うらぐに切まいりどうでも角山口しやなど談義の場ゟてふし原ねうまさうやうにあらりゆくも

はある所ハ学師の心も強佛法勧ゟたりしぞ。角説バかりがあり。たら終をあせバおりしがるど。好子をとおやそひこむゆへ入り。経論の所ハわまて退屈し。只目睡眠ね袖どしまりね障家ねどゟは古事ならう麁目をはらひ。談義がすんじうら香破鏡でふせし。紫ありゆりしやと云ゟ下心。これハ本お方ね田舎僧なるも。三ケ乃律の福僧ハ折りかし醫師ゟ花ての長羽織。玄ねと

いつのとうりぐせぬ。されどわが見れバ腹痛乃女郎。痞気が舞子などに出合。茶の下邊。脈を見てくぶんせみまうハ氣を轉じ也。さつくものゝ見付らまして八街賣女ならで。法華經にも見えれバ天竺にもある浄じやと満ぐ遊てまで日をきらめかし。わまて穢淨歸依の時ハ中く長猫の自墮落なれ。只難く法を弘めんとのゝ世話をやきし不ふ。

今は法ハ八宗。九宗に。ならまり。繁昌に似て佛意ハよりも失ぬ法ます下ハ仏法といふ口きゝの一派とおもへハ害ハ形しと笑ふる

世の物真似巻一終